

永井荷風の日本文明批評

—その江戸文明傾斜を中心に—

徐梅婷

先行研究を踏まえて、本論文は、永井荷風という近代日本を生きた知識人について、日本文明批評の活動を考察することにより、江戸文明傾斜を文明批評の一環としてその先駆性及び限界を再検討しようとする試みである。

第一章では、永井荷風の知的背景として、外的環境からの影響——すなわち明治時代の風潮及び家庭の感化——と、芸術のために自ら積極的にした稽古、すなわち内的条件という両方について考察すると、後年彼の文明批評や江戸文明傾斜を芽生えさせたものが明らかになる。

続いて、文明批評を激しく行い始めたのは帰国後なので、第二章では五年間の西洋体験に主眼を置き、滞米及び滞仏中、永井荷風は何を見たのか、米・仏はそれぞれ彼にとって何を意味するのかという問題を考察した結果、永井荷風の西洋体験は、文学的創造にのみならず、彼が日本の社会を距離を置いて観察し、批評するにもあずかって力があつたということがわかった。そういう西洋体験を通して、帰国後西洋文明模倣の近代化に対して批判的な態度を取り、東洋的文化風土に根ざして成長してきた民衆文化という近代日本文化の基盤を見出し、それを江戸時代の文明に求めて再評価しようとした。

第三章では、永井荷風の江戸文明傾斜の真意に着目する。一見明治文明批判から江戸趣味へ「転向」したかのように見えたが、明治政府の文明開化を旧物破壊として失望した結果、尊重すべき伝統文化に対する危機感と江戸文明の保護者としての使命感を覚えて、その追慕の念を江戸時代に寄せることによって現代の状況を批判するという永井荷風独自の対応が認められる。さらに、『江戸芸術論』を中心に、江戸文明に向けて永井荷風の主張を具体的に分析することによって、江戸文明の美の要素や美の特徴、完全な保存という美意識を読みとり、江戸趣味というつかまえ難いレッテルを明らかにすることを期する。

各章の考察を通して、その言動に限界がないともかぎらないが、明治初めの文明開化史観・徳川暗黒史観の流れの中、過ぎ去った江戸時代の文華を美的な目を以て見直し、江戸日本に対する肯定的な評価と共感を示したという永井荷風の文明批評は時代を先取りしており、「後ろ向きの先駆者」の姿勢が見られる。